



題字 井口 文章
再刊 第238号
印刷・発行
錦城高等学校新聞
委員会

みんなでつくる
錦城高校新聞

(特集)全国高等学校総合文化祭
優秀校東京公演



宮城県のゆるキャラ むすび丸

伝える 国立劇場の夏

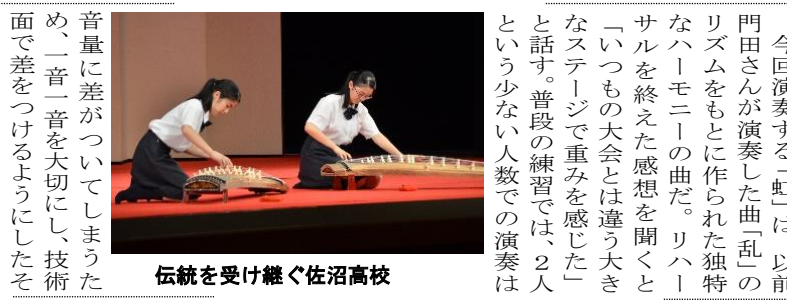
第28回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演特集

今年で28回目を迎えた全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演。この夏、みやぎ総文祭を飾った若者の力がこころで再び発揮された。

一音一音を大切に
宮城県登米市にある佐沼高校の箏曲部は部員数5人で、

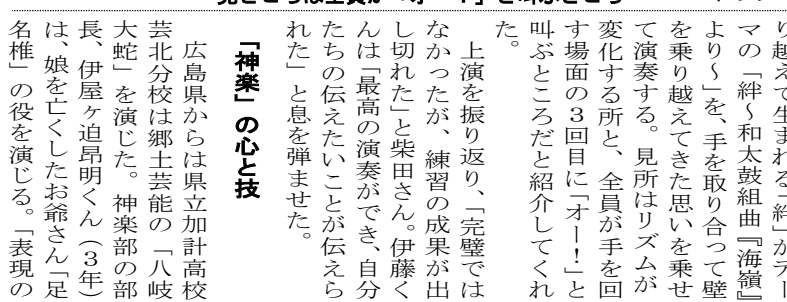


1日目OPは町田工業・第四商業・日本美術・川村学園の4校合同フラダンス



伝統を受け継ぐ佐沼高校

今年演奏する「虹」は、以前門田さんが演奏した曲「乱」のリズムをもとに作られた独特なハーモニーの曲だ。リハーサルを終えた感想を聞くと「いつもの大会とは違う大きなステージで重みを感じた」と話す。普段の練習では、2人という少ない人数での演奏は音量に差がついてしまったり、一音一音を大切に、技術面で差をつけるようにしたそ



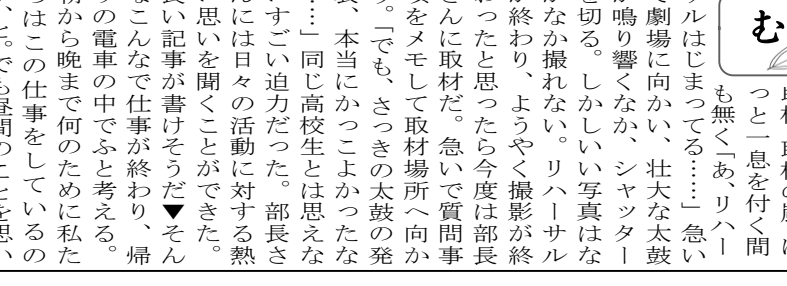
見どころは全員が「オー！」と叫ぶところ

愛知県から来た日本福祉大学の学付属高等学校の伊藤敏祐くん(3年)、柴田葉奈さん(3年)は、海外や東日本大震災の被災地での公演もしている。今回の公演では共に困難を乗り越えて生まれる「絆」がテーマの「絆」と太鼓組曲「海濱」を乗り越えてきた思いを乗せて演奏する。見所はリズムが変化する所と、全員が手を回す場面の3回目に「オー！」と叫ぶところだと紹介してくれた。



奥深さに苦悩する場面

奥深さに苦悩する場面もあるが、伝統を壊さないように演じたい」と語った。埼玉県から来た県立秩父農工科学高校が演じるのは、SNS上のグループを舞台とした「流星ピリオド」。主人公のハルキヨが姿を見せないところから物語は始まる。彼を心配した仲間たちは、彼を元気づけるため、一年前に交通事故で亡くなったミーコが計画していた「流星ツアー」を実行しようとする。なんとハルキヨを計画に引き出すことはできたものの、どうも様子がおかしい。死んだミーコから連絡が来るというのだ。最初は妄想だと信じようとしなかったが、ミーコがグループ内にも現れるようになってきた。

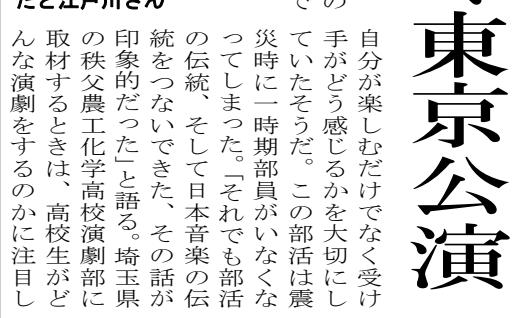


表情豊かに全身全霊で演技する

部長の武田龍之介くん(2年)に演劇のどんなところが楽しいか聞くと、仲間と協力し合えるところが好きだと言った。武田くんは1年生のとき、部員は1年生1人、3年生5人だった。その頃は公演にほとんど出陣しなかったが、練習がとて多くなって大変だったという。そのとき3年生に救われたそうで「今度は自分が先輩として後輩を助けてあげたい」と話す。

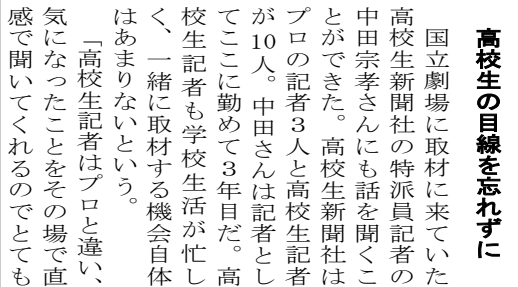
プロの記者に聞く東京公演

完成度はプロ顔負け
今回の東京公演に取材に来ていた朝日新聞東京本社文化課から報道部文化グループの記者江川夏樹さんに取材することができた。普段は演劇中心の取材をしていて、俳優や演出家に話を聞くこともあるという江川さん。東京公演はプロ顔負けの完成度だったと話した。



高校生の姿が印象的だと江川さん

自分が楽しむだけでなく受け手がどう感じるかを大切にしていたそうだ。この部活は震災時に一時期部員がいなくなってしまう。それでも部活の伝統、そして日本音楽の伝統をつないできた、その話が印象的だったと語る。埼玉県秩父農工化学高校演劇部に取材するときは、高校生がどんな演劇をするのかに注目し



「高校生記者を頼りにしています」

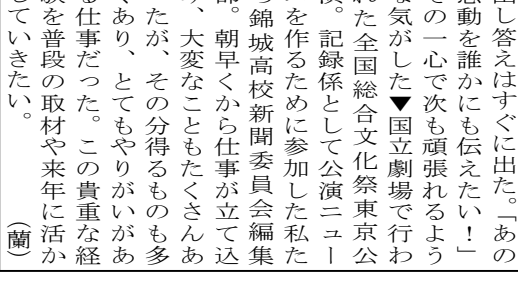
国立劇場に取材に来ていた高校生新聞社の特派員記者の中田宗孝さんにも話を聞くことができた。高校生新聞社はプロの記者3人と高校生記者が10人。中田さんは記者としてここに勤めて3年目だ。高校生記者も学校生活が忙し



登場人物の感情の機微を表現

この作品は舞台がSNS上のやりとりであることが一つのポイントだ。コミュニケーション

8年前から公演ニュース発行のいきさつを昭和第一学園高校元教諭の松井孝二さんと、錦城高校元教諭の松井巖さんに聞いた。今年で第10号になる公演ニュースでは様々な人にスポットライトを当てている。両先生は「取材をする生徒にとってもいい経験になるし、取り上げられる方にとっても光が当たることでやりがいになるだろうと思います」と意義を語った。公演の裏方で活躍する人達に注目だ。



公演ニュース発行の経緯

朝9時、慌ただしく準備が進むなか楽屋に入る。話し合いを済ませるとその後は取材、取材、取材の嵐。ほっと一息を付く間も無く「あ、リハールはじまってる……」急いで劇場に向かい、大きな太鼓が鳴り響くなか、シャッターを切る。しかし写真がなかなか撮れない。リハールが終わわり、ようやく撮影が終わったと思ったら今度は部長さんに取材だ。急いで質問事項をメモして取材場所へ向かう。「でも、さっきの太鼓の発表、本当にかっこよかったな……」同じ高校生とは思えないくらい迫力があった。部長さんには日々の活動に対する熱い思いを聞くことができた。良い記事が書けそうだとそんなこんなで仕事が終わる。帰りの電車の中でふと考える。朝から晩まで何のために私たちがこの仕事をしているのか。でも昼間のことを思い出し答へはすぐに出た。「あの感動を誰にも伝えたい！」その一心で次も頑張れるような気がした。国立劇場で行われた全国総合文化祭東京公演。記録係として公演ニュースを作るために参加した私たちが錦城高校新聞委員会編集部に。朝早くから仕事を立て込み、大変なこともたくさんあったが、その分得るものもたくさんあり、とてもやりがいがある仕事だった。この貴重な経験を普段の取材や来年に活かしていきたい。(蘭)